

「ガネフォ」雑感

ローマオリンピック出場

宮村 元信

(日本大学出身)

(58クラブ)

日本水球競技の歴史の中で、異例の国際大会であったと思われる「ガネフォ」の詳細な記録は、公式には残っていないのではないかと想像します。

しかし、「ガネフォ」を開催した国やその大会に参加したアスリート達にとっては、それぞれの思惑と意志があり、それを記録として後世に伝えるべきだと思います。

そういう意味でオフィシャル記録の無いと思われる「ガネフォ」について、その当事者が記念誌として発行される事は、誠に意義深いものがあると感じます。

60年前の時世は、世界政治情勢は混沌としており、政治とスポーツは別だとは言え、スポーツイベントの開催は、簡単ではなかったように思います。

当時日本は、IOC秩序下において、1964年東京オリンピックを控え、選手強化をはじめその準備に注力しておりました。

その日本にも「ガネフォ」参加の要請がありましたが、IOC不認可の大会であり、関係各方面は参加を憂慮しました。

私達1958年卒業の有志が各大学横断的に集まり「58クラブ」を立ち上げ、国内競技大会で活動していました。そのメンバーの中で「ガネフォ」参加希望者が数人おり、水連からの不参加の要望もありましたが、「58クラブ」としては本人の意思に任せるという方針を出しました。

参加した皆さんは、ほとんどが社会人2～3年以内の人達でこれから第2の人生のスタートと言う大変な時期にもかかわらず、水球に対する情熱と国際大会出場への願望で、大変厳しい条件下での決心は大いに感銘を受けたものです。

「ガネフォ」から数十年経って社会人としても十分な経験を積んだ頃「ガネフォ」を振り返った時、どんな感じをも持ったのでしょうか？

当時のインドネシア・スカルノ大統領の思惑は、社会主義国のリーダーとして世界にアピールする為の思惑があった様に思います。

しかし、参加したアスリート達は真摯に競技に集中し、大会期間中、参加アスリートは特に地元住民との交流を深め、スカルノの思惑とは違ったスポーツイベント本来の役割を果たし、本人たちも得難い経験をした事は素晴らしい事だったと痛感します。

以後参加した皆さんが、あの貴重な体験を生かし立派に成長し、今日に至り、懐かしい思い出として記念誌の出版に至った事に心より敬意を表します。

当時の仲間は皆な年を取りましたが、これからも水球で鍛えた体と精神で楽しい人生を送られんことを切望します。



ローマオリンピックにて
後列右端が私（宮村）